

学位論文題名

Personality, identity and self-related motivation in the  
L2 learning process: An analysis of causal models for  
Japanese learners of English

(L2学習に關与するパーソナリティ・アイデンティティ・自己形成力－  
日本人英語学習者の因果モデル分析)

学位論文内容の要旨

本研究は、パーソナリティ、第二言語使用に対する態度、第二言語を使う自己像などの個人差要因が第二言語学習への意図的努力に影響を与え、さらに第二言語の産出に波及するとする動機づけモデルを構築し、その妥当性を実証的に検証することを目的としている。本論文は、6章からなり、参考文献と4点の付録がつけられている。以下、各章の内容を記述する。

第1章では、本論文の序論として、研究の目的と意義を説明している。経済や文化のグローバル化が進む中、国際的に専門知識・技術を発信する人材となるためには、第二言語の運用力を含む国際性の涵養が必要であると考えられるようになってきた。こうした背景から、人々は「国際共通語としての英語 (EIL)」の重要性を認識し、英語を用いて情報を共有する能力獲得を意欲すると筆者は主張する。応用言語学では、第二言語を学ぶ意欲(動機の強さ)と第二言語習得達成の関わりが調査されてきた。なかでも重視されてきたのは、目標言語話者や目標文化に対する態度・接近意欲が第二言語習得の達成度に強く影響すると主張する Robert Gardner らによる社会教育モデルである。しかし、このモデルの中心概念である「統合的動機づけ」、つまり目標文化への統合志向は、今世紀に入り痛烈な批判を浴びた。その理由は、近年の研究により、バイカルチュラル (あるいは、ハイブリット) アイデンティティの深化や国際的な自己の形成への願望・切迫感が、英語が言語環境にないなかでそれを習得する「外国語としての英語 (EFL)」の習得意欲をより強く生むことが示され、この事実を社会教育モデルでは十分に説明できないためである。Dörnyei (2005) は、EFL 環境での英語習得意欲を含めた包括的な動機づけを説明するために「第二言語動機づけ自己システム (The L2 motivational self system)」を開発した。筆者は、これを基盤にさらに発展的な動機づけモデルを構築し検証する必要性があるとしている。

第2章では、先行研究および予備論文のレビューを通して、第二言語動機づけ自己システムが第二言語動機づけ研究で必要とされるに至った背景と、この自己システムがどのように構築されたかを述べている。Dörnyei (2005) は、第二言語面に特化した自己(「第二言語自己」)に注目することで、第二言語習得の動機が生まれる現象を包括的かつ全人的に捉える研究の必要性を主張した。第二言語動機づけ自己システムを基盤とする第二言語動機づけモデルの妥当性が、近年、様々な国々での調査で確認されている。しかしながら、Dörnyei を初めとする第二言語習得動機づけ研究者たちは、第二言語自己の形成を促す仕組みの解明には、この自己システムの各構成要素が他の認知的・感情的・環境的要因とどのように影響しあうのか、今後も研究する必要があると主張している。

当該分野における以上の研究の流れの上に、本研究では、第二言語動機づけ自己システムの構成要

素である「理想的第二言語自己」、「義務的第二言語自己」、「第二言語学習経験」を取り上げている。また、先行研究のレビューを行う中で筆者が着目するに至った「国際的志向性 (Yashima, 2002)」、「英語学習の社会的重要性」、「心的境界の厚さ・薄さ (Hartmann, 1991)」を構成概念に加えて、これらが「第二言語学習への意図的努力」に影響を与えるモデルを構築した。さらに、各構成概念が示す個人差と、産出された第二言語の「複雑さ」・「流暢さ」との間の関係を筆者は予測している。

第3章では、まず、心的境界の厚さ・薄さと第二言語の学習・行動の関係を調査した筆者の実証的研究 (Sugawara, 2010) を再考している。境界の厚さ・薄さに関わる広範囲のパーソナリティ傾向について考察することで、第二言語学習の質や第二言語習得に関与する領域をより深く理解するためである。さらに、第二言語の学習・行動面に関して、心的境界の厚さ・薄さと関わるパーソナリティ傾向による第二言語産出への影響を調査した筆者の事例研究 (菅原, 2009) から、「曖昧さへの寛容性」と産出言語の「複雑さ」・「流暢さ」の関係について特に考察している。この事例研究で行った相関分析・重回帰分析の結果から、「新たな見知らぬ対象への開放性」は第二言語学習における「曖昧さへの寛容性」と言語産出における「複雑さ」・「流暢さ」に影響するとしている。

第4章では、2章で提示したモデルが、非英語専攻の大学生 174 名を対象として収集したサンプルに十分に適合するかどうか共分散構造分析を用いて検証している。各構成概念の測定のために質問紙尺度を作成し、各尺度の内的一貫性をみる信頼性検証を行ったのち、各測定モデルの妥当性の検証および構造方程式モデルとデータの適合度・潜在変数間の関係の強さの測定を実施した。潜在変数間の関係は一部のパスを除いてすべて統計的に有意なものであった。修正を加えたモデルの検証では、 $\chi^2$  乗検定の統計量を除く 5 種類の適合度指標がデータへの当てはまりのよさを示し、構築したモデルはデータを十分に反映すると筆者は主張している。

第5章では、前章で検証したモデルの各構成要素と産出された第二言語の「複雑さ」・「流暢さ」の関係を、前述の質問紙調査で同意した大学生から収集した言語データを用いて検証している。秋学期の受講者 (123 名) には 30 分、春学期の受講者 (51 名) には 15 分の時間制限を設け、議論文による英作文タスクにより言語データを収集した。秋学期のデータを、複雑さとして「統語的複雑さ」・「語彙の豊かさ (異語率)」、流暢さとして「産出率」・「産出言語の長さ」の指標を用いて産出言語を分析した。また、春学期のデータで「流暢さの欠如」を測定した。これらのデータと前章でみた各変数との相関分析を行った。「理想的第二言語自己」や「義務的第二言語自己」などの個人差要因と言語産出、あるいは「英語学習への意図的努力」と言語産出などの間に統計的に有意な正の相関を確認した。さらに、秋学期のデータを使用し、言語産出指標の合計を基準としたステップワイズ法による重回帰分析を実施した。その結果、「意図的努力」と「理想的第二言語自己」が複雑さを予測すること、ならびに「意図的努力」は「流暢さ」も予測することが明らかになった。相関分析の結果も考慮して総合的に判断すると、概ね予測した結果を示すと筆者は主張する。

最終章では、以上の結果を総合して、全人的かつ成長的観点から、学習者が EIL 自己の形成力を生み出す (あるいは抑制する) 過程を考察している。筆者は、高等英語教育への示唆として、グローバル社会を担う国際的発信力を持った人材の養成には、国際的な場で英語を使う自己像を学習者が持つよう、彼らに国際的志向性を育成する学習支援の提案を行うとともに、包括的な第二言語学習動機づけ研究の進展のためには、パーソナリティなど個人差要因の研究が不可欠であると主張している。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 河 合 靖

副 査 准教授 小 林 由 子

副 査 教 授 横 山 吉 樹(北海道教育大学札幌校)

## 学 位 論 文 題 名

### Personality, identity and self-related motivation in the L2 learning process: An analysis of causal models for Japanese learners of English

(L2学習に関与するパーソナリティ・アイデンティティ・自己形成力ー  
日本人英語学習者の因果モデル分析)

本論文は、第二言語習得の動機づけの包括的な説明を試みる「第二言語動機づけ自己システム (The L2 motivational self system; Dörnyei, 2005)」を基盤に、さらに発展的な動機づけモデルを構築し実証的に検証することを目的としている。第二言語習得の動機づけ研究では、目標言語話者集団への統合を志向する「統合的動機づけ」が長く重要視されてきた。が、経済・文化のグローバル化の進展に伴い、二言語使用者としてのアイデンティティ形成が、特に英語を外国語として身につける際に重要であると近年主張されるようになってきた。第二言語動機づけ自己システムでは、内発的に動機づけられた第二言語話者としての自己像（「理想的第二言語自己」）、外発的に動機づけられた第二言語話者としての自己像（「義務的第二言語自己」）、「第二言語学習経験」などが構成要素に取り上げられているが、本研究では日本の英語学習文脈で注目される「国際的志向性」やパーソナリティ要因の「心的境界の厚さ・薄さ」を加え、多様な個人差要因が、「第二言語学習への意図的な努力」に影響を与え、さらに言語産出に波及するより包括的な動機づけモデルを構築している。

研究の成果として、筆者は次のように主張する。「心的境界の厚さ・薄さ」は、「国際的志向性」や「英語学習の社会的重要性に対する認識」に影響を与え、これらが「理想的・義務的な第二言語自己」に影響を及ぼし、さらにこれらが「第二言語学習経験」とともに「第二言語学習への意図的な努力」に影響する。そして、この学習への「意図的な努力」が、産出された第二言語の「流暢さ」と「複雑さ」に影響を与える。したがって、日本の英語学習文脈においては、「国際的志向性」を高め、「理想的な第二言語自己」を持てるような働きかけをすることが、英語学習者を動機づける上で重要である。

本論文について、研究成果の意義、方法論的貢献、教育への示唆の三点から審査した。その結果、審査担当者は、それぞれ次の点において本論文の意義を認めるものである。

1) 第二言語習得動機づけ研究の近年の動向を踏まえて、より包括的なモデルを実証的

に検証したことは、当該分野の今後の研究の発展に寄与する。2) 当該分野ではあまり使われてこなかった分析方法を取り入れ、既存の手法と組み合わせて研究を進めている。3) 得られた知見から、特に日本の学習文脈における英語教育に対して有用な理論的提言を行っている。以下、順に詳述する。

まず、一点目の研究成果の意義について述べる。第二言語習得動機づけ研究においては、「理想的・義務的自己」の概念を用いたモデルは比較的新しく、また当該分野で積み上げられた研究を発展的に継承している。さらに、パーソナリティ要因を動機づけモデルに取り入れた研究、および言語産出までを実証的に検証した包括的研究は数が少ない。個々の要因を取り上げる基準やそれぞれの定義についてまだ改善の余地が残るが、今までにない包括的なモデルを構築しており、そこに新規性を認め、当該分野の発達に寄与すると判断する。

次に、二点目の方法論的貢献について述べる。従来の第二言語習得動機づけ研究は、質問紙を使用して因子分析、クラスター分析、共分散構造分析などを用いるものが主流であった。本研究では、これらの分析手法に加えて、必要に応じて重回帰分析を用いている。また、個人差要因と言語運用能力との関係を調べる場合も、先行研究では学習者が認識する自己評価を用いることが多かったが、本研究ではタスク研究で用いられる産出言語の「流暢さ」や「複雑さ」を考察する手法を取り入れて、より客観的な分析を試みている。数値の処理に若干粗さが残るが、結果の解釈を行う上で大きな影響はないと判断する。本研究の手順をモデルとして、包括的な動機づけモデルの検証が今後増加すると予想される。

最後に、三点目の教育への示唆に関する評価を述べる。これまでの第二言語習得動機づけ研究では、「統合的動機づけ」を重視した社会教育モデルに代表されるように目標言語の文化圏での第二言語習得を対象にしたものや、学習者の動機づけ分類を行い、個々の学習者に教員がどのように動機づけていくかを示唆する研究が主であった。本研究は、パーソナリティなどの個人差要因を対象としていながら、「国際的志向性」や「理想的第二言語自己」の創出という日本の英語学習環境のなかでは普遍的な教育提言を行っており、各教育機関や地域・国の教育目標・教育課程の改革へ向けた示唆となっている。したがって、本論文は日本の教育政策に対しても十分に示唆を与えうる教育的意義を有すると判断する。

以上の三点において、本論文は高い学術的意義を持つものである。よって著者は、北海道大学博士（学術）の学位を授与される資格があるものと認める。